

黙阿弥の歌舞伎における明治の視覚化*

一 『島衛月白波』を通して一

李賢貞**

目 次

1. はじめに
 2. 明治における偽りの発覚
 - 2.1 千太の立身と新聞情報
 - 2.2 島蔵の立身と郵便制度
 3. 改心と明治の教育
 4. 改心の拡大—明治政府への帰属
 5. おわりに
-

1.はじめに

幕末から明治中期を代表する歌舞伎作者河竹黙阿弥（二世河竹新七；1816～1893）は白波作者と称されるほど、主に盗賊を主人公としたものを書き続けていたが、明治14年引退を表明し（実際は引退後、また作者として復帰するのだが）引退作として『島衛月白波』（以後『島衛』と略する）五幕九場の散切物を上演した。本作の題目は島で「島蔵」、「衛」で千鳥に縁の深い松島の千太、「月」で望月輝をそれぞれにあらわし、さらにその三人の主人公がいずれも盗賊だったということで「白波」と結んだものである。1)歌舞伎の一つのジャンルとして成立した散切物2)は明治の文明開花による新風俗

* 本稿は2007年度BK2 1 高麗大学中言語文化教育研究団の支援により研究された。

** 高麗大学 講師

1) 「右島衛は明治十四年十一月新富座において小生一世一代の折賊の狂言の作納めに脚色（しぐみ）たる物なれば重なる役は賊にして後改心をなす事になしたり去れば賊でなくもがなのお照返も賊にせしは白波作者の一世一代賊を主とせし狂言故例の拙き条立も多年御愛顧蒙りし好劇家の諸君方宜敷く見免し願ひ上候」とその創作動機を明らかにしている。

神山彰編『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治編 2001年 p.383.

を積極的に取り入れ、従来の歌舞伎に対する変化を試みた作品群であったのだが、その取り入れが西洋思想の具体的な理解と実践を伴う、いわゆる「近代化」という側面において、前時代性を免れ出るものではなく、表層的な物に留まってしまったことを河竹繁俊らが指摘し、その限界性によって積極的な評価はされていなかった。しかし1990年以後、明治の散切物は江戸から継続している庶民という観客の娯楽のために上演されていたもともと身近な庶民劇としての特色が考慮され、明治という時代が庶民の文芸ではどのように視覚化しようとしていたのか、また観客はこれらのイメージをどのように受け止め、認識していたのかなどを読み取ろうとする試みがなされている。

神山彰は「芸術」や「演劇」という概念が今とは異なる当時の文脈の中で散切物を考えることを提示し、散切の多産された明治十年代の「啓蒙」は、新時代に活力を与える、非常に魅力あるイメージの源泉であり、庶民は「啓蒙」を一種の見世物として、多くの風俗を通して積極的に娯楽化し、教訓さえも茶化して楽しんでいたと指摘する。³⁾さらに渡辺保はこの劇において、黙阿弥が見せた明治の近代化に対する視点の明確さについて言及している⁴⁾。本稿ではこれらの論を踏まえながら、二人の主人公島蔵、千太に焦点をあて、特に一幕、二幕、そして最後の五幕を通してその行動を分析し、江戸歌舞伎の作劇法をもとにしながら、舞台に視覚化された明治について考察する。またこれらの分析により、黙阿弥による明治歌舞伎の展開と意図、そしてそれらが観客にあたえた影響についても明らかにしたい。

2. 明治における偽りの発覚

2.1 千太の立身と新聞情報

『島衛』はこの年の六月に上演した自作『古代形新染浴衣』の続編に当り、同作中で福島屋に押し入った二人の盗賊明石島蔵と松島千太の後日談として構想されている。

『島衛』の二人は黙阿弥の白波物の主人公の特徴を踏まえながら、⁵⁾明治の開化の洗

2) 歌舞伎世話狂言の一種。明治初期の散切り頭・洋服姿などの新風俗を取り入れたもの。

3) 神山彰編 『河竹黙阿弥集』新古典文学大系 明治編 2001年 解説p. 528

4) 「それよりも私に重要に思えるのは、その結果島衛にあらわれた、この老劇作家の透徹した、冷静な時代への視点である。たとえそれが復讐や挑戦の結果であろうと、時代や権力のからくり、日本という国の過去と未来、そして明治という日本の近代化のプロセスにおける歪みを一劇作家がとらえていることに私は驚かざるをえない。」(p. 300)

渡辺保 『黙阿弥の明治維新』新潮社 2001年

5) 今岡謙太郎は黙阿弥の白波物の主人公の特徴を「①市井の人物が主人公となる、②主人公が盗みや殺人、あるいはそれに準じた犯罪を犯す、③主人公がその血縁関係の因果から自分の罪を悟り、その悪業を悔悟する、というパターンが繰り返し持ち込まれる」としている。

礼を受けることになる。

序幕は松島千太が盗んだ金を持ち、故郷へ向かう途中に白川旅籠屋で逗留しながら、まわりの人や探索方に泥棒という正体がばれて逃げていく筋となっている。

千太は白河宿に千右衛門という偽名を使い、そして身分を銀行員⁶⁾と偽って数日間泊っていた。旅芸者のお照に目をつけ彼女を自分の物にしようとする下心で、お照の母のお市がお照を娼妓として売ろうとするのを、身の代金を出して恩を売ったりしている。このように芸者と遊び、長逗留をする千太はまず探索方に不審がられる。

菊蔵 遊山旅か知らねへが、十日間の長逗留、名所古跡を見るまでもなく、

幸助 芸者を連て歩行荒っばい遣ひ振りだから、此間から目を付て居たのだ。

みち そう仰有れば銀行の御手代衆には、そくはぬ物言ひ、漢語交の其内に、勇みな詞がござります。

太助 めったな事は云れないが、

半次 ども衆かも知れませぬ。(p. 158)

ここで確認できることは、探索方や宿の主人が明治以後の新しい職業である銀行人について見聞した情報や抱いているイメージである。開化された世の中にできた職業についている人ならば、芸者をつれてお金の無駄遣いなどしない堅実な人であるべきだということ、また教養と知識をそなえ「勇みな詞」などはつかうはずがないということである。このような認識を具体化させ、千太への疑惑が深まることを観客に示すのは次に宿で偶然再会した親戚である百姓東右衛門と陸兵衛によってである。千太は自分の親がすでに他界していることを聞くことになるのだが、以前の悪党としての千太を知っている親族は千太が銀行員に出世しているという言葉をいぶかしむ。

東右 シテ今聞は銀行の、二等手代に成たと云が、千太手前が勤て居る、其銀行は何と云銀行だ。

千右 只、銀行でござります。

東右 三井を初め所々に有が、さうして所は何所であるぞ。

千右 茅場町でござります。

東右 シテ何番の銀行だ。(ト千右衛門ぐっと詰り、)

千右 三百三十三番でござります。

東右 近頃諸県に銀行が大層出来たと云事だが、まだ日本国中に二百番台は出来ぬはずだが、

千右 え。(トぎつくり思入。)

東右 三百三十三番とは。

今岡謙太郎 「幕末の歌舞伎<江戸>」『歌舞伎の歴史Ⅱ』岩波書店 1997年 p.66

6) 銀行員という身分の偽りについて神山彰は黙阿弥の旧幕以来のしがない姿の主人公を、新時代の四民平等での立派な身分に立身出世していると指摘する。神山彰 前掲書

- 千右 サア是は近所に山王の御旅所が有る故に、山王の猿にかた取り、三百三十三番でござります。
- 東右 夫は珍しい銀行だな。
- 陸兵 わし等は田舎者だけれど、新聞が大好故、凡東京の小新聞はあらかた買って読で見るが、まだ広告の其内にも、三百三十三番と云銀行は、まだない様だ。
(p.182) 7)

ここでは、実際東京に滞在して盗みをしていた、千太が知らない開化に関する情報が新聞という情報伝達手段により、田舎である地方にまですでに持たされ、千太の偽りが通用しなくなったことが台詞として表れる。これは千太が偽っていた銀行員という明治開化によってできた身分は、この劇が上演された明治 14 年の時点において、東京に直接出向かわなくてもその詳細を全国的に共有しうるものであったことを意味する。

千太は開化に関する情報に疎く、でまかせに言った銀行の名前は山王の神使いである猿にちなむという旧知識に依っている。千太も東京からの帰郷であって、銀行員がりっぱな立身出世となり、みなに尊敬されているということを知ってはいたようだが、文明開化による真の変化を体得できてはいない様子を見せる。それに反し、千太の親族は田舎にいながらも、千太のように偽りの身分が必要にならざるをえない盗み等の犯罪を犯さず、まっとうに生きているがために、開化と結びつく「新聞」を大好きになっており、千太の偽りをすぐにおかしいといえる常識を披露できる立場となっている。

穿った見方をすれば上記のやりとりは新聞という情報メディアが日本全国において一種の監視装置として作用しうることを暗示しているといえるだろう。また、千太＝盗賊がその愚鈍さによって開化した世に身の置き所なく、また置き去りにもされているという印象を与えているのではないだろうか。そして、開化を象徴する新聞の情報が当時の常識の一断面としてありながら、またその常識が千太の偽りと対になるという意味合いにおいて、新聞の役割が善なる側面を持ち、千太は新聞も読まない愚鈍さゆえの悪という対立項として呈示されているともいえる。

2.2 島蔵の立身と郵便制度

二幕の島蔵は千太と同じように東京で伊太里国の異人の所で番頭になれるほど出世したという偽りの身分を語り故郷に錦をかざろうとする。8)伊太里国の異人を取り上げる台詞は明治に入って活発化した西洋との交流を示し、西洋人との関係を持っていれ

7) 「島衛」の本文引用はすべて『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治編 2001年 による。

8) 『河竹黙阿弥集』の注によると初演の時、島蔵に扮した菊五郎の衣装はメリヤスの股引。モールの飾り付けのマント。襟は厚目のピロード。共ボタン。深ゴムの靴、となっている。あたかも西洋人の所で働いて出世したことを視覚的に印象づけるものとなっている。

『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治編 p.214.

ば、経済的に成功する可能性があるという当時の庶民の認識を反映させる。しかし、父は大金を持って帰郷した島蔵の出世を信じない。

磯右 悴の心が直らぬ故、

島蔵 何と仰有ります。

磯右 今日持って来た此金は（ト辺りへ思入有て、）盗んだ金で有ふがな。

島蔵 え（トぎつくり思入合方きつぱりと成り、）以前が以前の島蔵故、お疑ひもござりませうが、左様な金ではござりませぬ、今も申し上げます通り、外国人の鼻屑に成り、買物方を引請て一切致しておりますが、日本人と事替り外国人は腹が大きく、まだ新参の私へ千円金を貸してく下され、そちも商法するが能と、許しを請て先達で生糸を千円買いましたが、間もなく非常に値が上がり、わづかな内に三百円思はぬ利益を得ました故、是は天より賜物と存まして御恩送りに、持て参った三百円、不正な金ではござりませぬ。

磯右 イイヤ夫は呑込めぬ、外国人が何の位腹が大きな者だとて、昨日抱へた奉公人に今日千円の大金を、よもや貸しは致すまい、何故さう云身分に成たら、やうやく人に成りましたと、早く知らしてよこさぬぞ。

島蔵 サア、夫は。

磯右 昔と違って郵便で、手紙を出せば四日か五日で、便りのできる世の中に、なぜ知らしてはよこさぬぞ。

島蔵 サア。

磯右 外国館へボウイに這入り、主人の気にいり番頭に取立てられて斯う斯うと、最初からの手続を知らしてよこした上ならば、嘘でも誠と思ふ故、志しの此金を貰ふまい物でもないが、今日出し抜に帰つて来て、土産に呉た三百円、誠の事でも嘘だと思ふ、貧乏暮しはして居れど、人様の物は箸片し盗んだ事のない磯右衛門、不正の金は望みでない早く持って帰りおれ。（p. 222）

島蔵は自分の主人が外国人だという言葉を利用して、外国人は日本人と違い大金をすぐにくれるといい、自分が大金を持って帰ったことに正当性をあたえようとする。資金を調達しそれでお金をふやすことが可能であったということは、説得力のある理由になりうる。しかし父である磯右衛門は外国人について詳しい知識を持っていないとも島蔵のうそを見抜き、また反駁のできる余地を持っていた。それは郵便制度⁹⁾である。個人と個人を結ぶ情報伝達が、いくら距離が離れていようとも、庶民の間でさえ日本国内でな

9) 郵便の名称を考案したのは、初代駒通権正の前島密であるが、郵便を開始した明治四年当時は、駒通司の飛脚便とよばれていた。郵便という名称が用いられたのは、明治五年であるが、文字を読めない人が多く、田舎の紳士が郵便箱に書かれた差入口という字をタレベンと読み、雲隠とまちがえたり、切手を貼らずに現金と一緒に投函したりした。前島密はそこで明治六年三月に国内郵便税を設定して郵便規則を改正。里程の遠近にかかわらず、国内郵便税を一律にし、目方二匁以下のものは二匁までは二銭とした。市内の書状は目方二匁以下二匁までは一銭。越えるばあいは一封につき一銭、郵便税は切手で支払うことを取り決めた。

『明治、大正、昭和 風俗文化誌』国文学 5月臨時増刊号 1993年 p.15

らば一週間もかからないうちに行える世の中になったということで、その郵便制度を利用しないで家族との連絡を取らなかった島蔵は、連絡をしなかった間にまっとうな稼ぎをしてこなかったとして疑われても仕方のない立場となってしまふ。

個人間の連絡に費やされるこの短い時間は、島蔵が父に連絡しなかった 3 年間という時間の長さに比例され、島蔵のもっともらしい言い訳を嘘と見抜ける常識として働くことになる。千太が新聞の記事によりその正体がばれたように郵便という開化の産物は磯右衛門の疑惑へ妥当な理由を与えることを観客に印象づけ、千太と同様、島蔵の偽りが発覚してしまうのである。

3. 改心と明治の教育

帰郷した島蔵には父親、妹、そして岩松という息子が待っていた。岩松は久しぶりに帰った父の島蔵を喜んでむかえ島蔵の妹は岩松が学校でいい成績を取ったことを自慢しながら一緒に喜ぶ。

島蔵 三年逢ぬ其内に、大層行儀が能く成った。

お浜 此一二年は学校でも、試験の度毎及題して、何時も甲の御褒美を貰ひ今は二級になつておやわいな。

島蔵 夫と云ふのも一方成らず、親父様の御丹精、有難ふござります。

お浜 おとつさんに其方の書た、お清書をお目に掛や。(p. 224)

しかし、3年ぶりに会った息子が清書を取るために立ち上がったことで、島蔵は岩松の足が不自由になっていることを知る。そのわけを聞くと棚から包丁がおちて大怪我をしたせいだという。そして島蔵はその時刻が奇しくも福島屋で強盗を働きその主人の足を傷付けた時刻と同じであったことを知り驚く。

島蔵 此身の懺悔一通り、親父様も妹も篤と聞てくだされ。(省略)二十日の晩に浅草で質屋の内へ忍び込み、刃物で主を威し付引攫たる金包を(省略)京大阪から明石へ来て久し振にて親仁に逢ひ、不孝の詫に持て来た、三百円も盗物と見透されたでぎつくりと、轟く胸は又候や此岩松が足の怪我、千円盗んだ其時に支る主が向ふ脚、引払つて逃ましたか、時日も違はぬ先月の、しかも二十日の十二時前。

親の悪事が忽に、我子に報ふ悴が怪我、悪ひ事は出来ませぬ。(p. 227)

因果による報いのおそろしさに島蔵はついに自分が盗みをしたことを家族に告白しな

から、自分の罪を懺悔することになるのである。上記の島蔵の台詞として表れている因果による悪から善への改心は黙阿弥の幕末期の白波物における特徴としてあり¹⁰⁾、この筋のはこびは黙阿弥のお手のものでもあった。また、親の悪事の報いのために子供が不具になるという設定も黙阿弥の初期作である「夢結蝶鳥追」（一八五七年）の悪人長五郎の息子が生まれつき目が見えないという設定でも表れており、江戸歌舞伎の世界観の連続として目新しいことはない。

しかし、ここではその因果による改心の中心に明治の学校教育のことが絡んでくる。さっきの引用でもわかるとおり、岩松は学校で優秀な成績をとっており、明治政府が築いていこうとする道德の規範を学習してそれを体現できる資格を持っている人物となっている。そして、これらの事実に応じるかのように盗みをやめてくれと泣きすがる息子に島蔵はつぎのように語るのである。

岩松 コレおとつさん、子として親を恥しめるは、天の道に欠ますが、お前は学問せぬ故に、親に孝行することを御存なければ是迄に、おちい様に御苦勞をお掛けなざるを子心にも、（省略）

島蔵 ヲヲ其恨は尤だ、今手前が云通り、己が育つ時分には、学校杯と云物は聞た事もなく、漁師の幼児が手習は無駄な事だと云中で親のお陰で寺屋へ行、先商売往来迄やつとの事で上たれど、童子教さへ習はねば、五常の道を知らねへから親が勝手に拵た子だ、孝行するにや及ばねへと己が勝手に理屈を付け、親を親とも思はずに、実に己は不孝をした、手前杯は開明の此結構な世に生れ、物の道理が分るのは、何れの果も学校で子供が教を請る故、こんな有難ひ事はねへ、誰に異見をされるより手前に云る此異見は（p. 228）

親孝行をするというのもまた、以前の黙阿弥作品において人物の性格の描写や行動の原理として頻繁に出てくるものである。1857年に初演された黙阿弥の初期作『鼠小紋東君新形』には序幕で親孝行の登場人物が親と子の憐れさを思い武士の雁の獵のじゃまをしたり、後には自分の父親を救うため未遂ではあるが、盗みを働こうとしている。¹¹⁾だが、ここではその孝が儒教でいう五常や開明した世の学校で習う道德とし

10) 「福島屋での傷害が同日同時に息子に報いるという因果の収束とその解明と、親子の別れの愁嘆は、明治三十三年の合評で、三木竹二ら若手劇評家が既にその無骨さを批判している。しかし、これもまた、初演時には愁嘆場を求める観客の欲求に応じた、幕末以来の黙阿弥の腕の見せ所であったし、（省略）かつては因果を通してしか実感できない世界もあったのである。」と神山彰も指摘している。神山彰編『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治編 2001年 p. 533

11) 山本博文は「江戸の盗人と刑罰概念」の中で死刑に当たる金子を盗んでいながら、常々養父母へ孝行を尽くした奈良瓦堂町勘三郎が旦那寺の助命嘆願によって死罪を免れた例を紹介している。黙阿弥の白波物に出ている登場人物と孝行が結びつく傾向は当時のこのような倫理観を反映していると思われる。

山本博文 「江戸の盗人と刑罰概念」三田村鳶魚著 朝倉治彦編 『江戸の白波』中公文庫 解説 p. 395-411

て述べられていることに注意しておかなければならない。島蔵の言葉は学校がなかった頃に学校の替りに行っていた寺屋（寺子屋）は商売往来という実生活に関わりあるものはおしえても、倫理や道徳なるものをおしえなかったことを強調している。そして、開明した世は、物の道理ということをおしえておきながらというふう聞き取れてしまう台詞になっているからである。

明治に作られ普及した学校が西洋の文明に追い付くために立てられた場所であるとするならば、新しい知識を習うということが学校で学ぶことの前提となっているはずだが、ここで強調されるのは道徳が強化される場としての学校という存在である。これにより、明治という時代における孝行は学校教育の賜物であるという概念にとって代わっていることが確認できる。

千太と島蔵は二人とも文明開化した世の中の変化を東京での偽りの立身出世という形で各々利用しようとしていた。それでも、二人の立身出世という嘘がまわりを完全にごまかし切れなかったのは、千太の親戚である東右衛門と島蔵の父の磯右衛門が百姓や漁師という身分でありながら、新聞、郵便という文明開化の恩恵を受け、島蔵よりも開化の常識を身につけていたからといえるのである。

結局、千太、島蔵の二人の盗人が偽っている身分は開明の象徴ともいえる、新聞や郵便により無力化される側面を持つ。また、その無力化された盗賊が改心するという過程は、因果応報という江戸時代の歌舞伎が持つ作劇法を生かしながら罪の意識が明治の学校教育を肯定する台詞へと結んでいくことで、明治における改心の枠が浮彫りにされてくる。

改心した島蔵は盗んだお金を福島屋に返し、その上で自首をする決意をする。改心した島蔵、そして両親のいない故郷に帰らなかった罪の意識のない千太は二人してまた東京に戻ることになる。

島蔵が改心していても千太が改心していない限り、福島屋への盗みという犯罪は完全には解消されない。三幕と四幕ではこのような二人の対照的な生活ぶりが描かれる。三幕で千太は盗んだお金を遊びで遣いはたし、お照と結婚した望月の家にお照が自分と結婚の約束をしていたという嘘をつきながらゆすりに行くが、もともと盗賊であったという望月に逆にすごまされる。ゆすりが失敗に終わったことで千太はこの夫婦に対して殺意を抱く。

これに対し四幕での島蔵は東京でいいものを安い値段で売るとしてお客さんに評判のよい店を開いている。偶然買い物で訪れた福島屋の娘が島蔵が盗んだお金のせいで借金に苦しむ吉原に売られようとして居るところを救ったりして、改心後の新しい生き方を見せている。

このように盗み以後、まったく異った生き方をしてきた二人は東京で再会を果たす。千太と再会した島蔵は千太からの盗みの誘いを完全には断わりきれないような状態で、夜

の招魂社の前で待ち合わせの約束をする。改心した島蔵の善とまた改心に至っていない千太との対決が予想される次の幕は、『島衛』の中でも単独でよく上演された最後の五幕¹²⁾、招魂社鳥居前の場として展開される。

4. 改心の拡大—明治政府への帰属

千太はまた悪事をやめず、女と酒に溺れ、私恨により士族である望月輝の家に忍び込もうとする。二人が待合わせた招魂社の前で島蔵はそんな千太を説得し、悪事をやめさせようとするが、千太は島蔵の説得を拒み、義理兄弟を結んでいた島蔵を殺そうとする。二人の死闘はこの劇のもっとも緊縛した場面になるが、島蔵の懇々なる説得と義理弟思いについに千太は感動し、改心することを誓う。

黙阿弥の劇作法において神社というのは、たびたび使われた場面設定であるが¹³⁾、ここでは特にその場所が招魂社（現在の靖国神社）として設定されていることに注目しておきたい。渡辺保も指摘しているとおり、この設定は従来の黙阿弥の作劇法を踏まえながらもこの劇のため意図的に設定された場所であるからだ。¹⁴⁾

12) 「白河に始まるこお芝居を招魂社で決着させるのが、維新以後の内戦の、一種の戦後処理に思えるのは、後世の思い過しに違いない。だが、黙阿弥の意識を越えて訴えかけてしまうものがあるからこそ、この場はかつて単独でも上演される程の人気を持続したのである。少なくとも、幕開きの台詞にあるような招魂社への畏敬と感謝と娯楽空間としての好奇心は、黙阿弥の世代から昭和の戦前までは一般的な心性であった。それを除外して、この場のしんとした秋の夜気の漂うなかでの、島蔵の名台詞が多く観客の心に訴えかけたかを感じできない。明治百年の昭和四十三年頃までは、明石屋と招魂社の二場構成でしばしば上演される人気演目だったが、以後の時代には上演が稀となったのも、明治の生活感や心情への共感の消失と関わるだろう。」(p.538)

神山彰編『河竹黙阿弥集』新日本古典文学大系 明治編 2001年

13) 「黙阿弥に限らず、江戸の芝居の序幕に神社や宿場が多いのは劇作上の必要からである。不特定多数の人物が入り出し、偶然の出会いがあっても不自然ではない設定として、参詣客や旅人が行き交う神社や宿場は、多くの人物を観客に紹介し、印象づける必要から、序幕によく用いられた。」

神山彰 前掲書 p. 531

14) 「招魂社は明治元年（一八六八）、維新の戦死者を合祀して各地に建立された。東京九段の、現在の靖国神社のあるところに東京招魂社が設立されたのが明治二年六月、全国の招魂社が合祀されたのが、明治八年。この時点で東京招魂社が全国の招魂社の総本社格になった。黙阿弥がこの島衛の大話を招魂社鳥居前に設定したのはなぜか。これまでの説明では明治十四年初演当時に東京新名所としてクローズアップされたからだといわれている。（省略）しかし黙阿弥はなんの必然性もないのに場所をきめたりしたわけではない。ここにも黙阿弥の周到にかくされた意図がある（省略）明治十二年（一八七九）六月四日、東京招魂社は靖国神社と改称され、別格官幣社に列せられた。同時に五月の三日間を戊辰の伏見、上野戦争、甲戌の佐賀、台湾の戦死者の慰霊、十一月の三日間を戊辰の越後、奥羽、箱館戦争、丙子の山口、熊本の乱、丁丑の鹿児島西南戦争の戦死者の慰霊にあてることが決定した（省略）つまり島衛の上演前後に靖国神社は、国家神道の象徴としての今日の基礎を築いたのである。そのことを当時の観客はだれでも知っていただろう。」

渡辺保 「招魂社の風景」前掲書 p. 291-293

それは、五幕の冒頭で通りすがりの人物にさりげなく次のようなセリフを云わせていることから確認できる。

○ コウ吉公、此招魂社と云のは、何を祭た物だな。

△ 是りやァ近化頃戦争で死んだ人を祭ったのだが、身分は軽イ兵隊でも、御上の為に死んだのだから、こんなに立派にできたのだ

蕎麦 昼間這入てご覧じまし、潜水の中に吹き地味が有て、庭の樹木は大した物で、四季に花が絶ませず、随分態々遠方から、お出被成ても能うござります。(p.360)

招魂社という場所が持つ意味とその場所のすばらしさを具体的に説明させているこれらのセリフは島蔵、千太の避けることのできない対決の真の意義が、それが例え、兵士としての活躍などでなくてもすべて「御上の為」に結び付くと暗示させているようで、二人の決着は招魂社以外の場所ではありえなくなる。

夜の招魂社の前で、まず島蔵は千太がもし罪を犯すなら絶対に逃げられないことを強調する。

島蔵 どんな遺恨がある事か、委しひ事は知らねへが、今夜手前が切り込んで、向ふの二人を殺した上、金を浚って逃げた所が、昨日ゆすりに行たから直に上の目串が付、夫からそれへ電信¹⁵⁾で知らせが回ればのがれられねへ、(p.368)

島蔵はここで千太と自分の偽りを暴いた文明開化の産物の電信を千太を説得するため用いている。つまり罪を悔い改めた島蔵はもう文明開化による情報網についてけっして疎くなく、罪を暴く装置としてのその効用をよく知っているのである。電信は冒頭の幕で出ていた、二人の立身出世の嘘をあばく役割をはたしていた新聞や郵便より、もっとも早く情報を伝達する。盗みを文明開化に対立するものとしてとらえるならば、盗みをやめた島蔵は開化と対立していた所から抜け出しており、開化による常識と島蔵の見識は一致することになる。

そして、盗みをやめ店を開き、改心したことが文明開化の体得であることを島蔵は自ずから認識しているかのようである。島蔵は千太に対して、開化という新時代が持つ法律の慈悲深さとすばらしさを、幕府という旧時代のものとは比べその違いについて自信よく

15) 「日本の電信は明治二年から八年の間に全国的にはほぼ完成したが、名称は一定していなかった。伝来した当初は「伝信」「電信」「電線機」などの名称が混用され、明治五年になって「伝信局」を「電信局」と改称し、はじめて現在の名称に落ち着いた。最初に電信を架設したのは、横浜燈明台局と裁判所間であるが、専ら官用として用いられた。一般の利用が公布されたのは、明治二年十二月二十五日。横浜・東京間に電信が開設され、明治五年四月になってようやく日本橋に煉瓦造りの電信局が置かれた。」『明治、大正、昭和 風俗文化誌』国文学 5月臨時増刊号 1993年 p. 15

台詞を紡ぐのである。

島蔵 旧幕府時分の十円から死罪にされる時ならば、とても死ぬなら行き掛けの駄賃と云もあるけれど、今は上の御処刑替り千円盗んだ強盗でも、一命助り終身懲役、此の有難ひ世の中に人を殺して命を捨てるは、あんまり手前は開けねへ、親から貰った大事な体をそまつにせずと心を入替、己と一所に堅気に成れ。(p. 370)

時代が変わったことにより、人を殺すことは開明されていない、時代おくれの行為と規定し、改心＝開明でその甲斐があることを力説する。旧幕府が十円というはした金を盗んでも死刑になっていたのに、有難い世の中になってからは死ぬことはないという台詞には、旧幕府への理不尽さに対する批判がさりげなく盛り込まれているともいえる。16)千太は島蔵の台詞に対し、ほかに反駁する答えをみつけられなかつたのか家族のことをあげながらまた改心を拒む。

千太 お前は親父や妹に可愛い倅が有る事だから、心を改め堅気に成、素人に成る気に成たたらうが、おらア親も無りやア兄弟もなし、今更堅気に成た迎、誰も喜ぶ者はねへから、一生涯盗みをして、仕てへ三昧な事したら、切られて死でも本望だ。(p.370)

江戸歌舞伎において、悪から善への改心のきっかけは二幕の島蔵の改心を見てもわかるように、親と子への因果応報であることが主であった。1860年に初演された黙阿弥の代表作「三人吉三郭初買」においても、親の土左衛門伝吉が短剣を盗み逃げる途中孕んだ犬を殺して逃げたことで、子供であるおとせと十三郎がお互いの存在を知らずに近親相姦を犯していたという因果応報が表れており、この事実と直面した時に悪人は盗みであれ、殺人であれ、犯罪を犯した自分の悪行の恐ろしさに改めて気づかされるのである。

つまり、以前の黙阿弥の劇においては悪いことを承知で罪を犯す悪人は自分の欲望に忠実であり、また親思い、子思いの家族の絆については何より敏感であるが、それ以外の他者との関係は罪を悔いる動機としては希薄にしかなりえなかった。このような黙阿弥の江戸歌舞伎の文脈においてなら、堅気にはならないという千太の言い分も、改

16) 丹野 顕は 1742年に制定された『御定書百箇条』の「盗人御仕置之事」に次のように記されていることを紹介している。

享保五年 寛保元年極

一、手元にこれ有る品をふと盗み取り候類

金子は十両より以上、雑物は代金に積り十両位より以上は、死罪

金子は十両より以下、雑物は代金に積り十両位より以下は、入墨敲

丹野 顕 『江戸の盗賊』青春新書 青春出版社 2005年。p. 182

心をする甲斐がないことに対する理由としては十分なものである。このような千太の台詞を受け、島蔵は家族という意味の拡大をはかり千太に言い聞かせる。

島蔵 夫りや手前あんまり愚だ、仮令此世に居られねへとて、草葉の陰で親達が、
 どんなに案事て居るか、知れねへ、死んで仕舞ば空へ帰り、跡形もねへ物なら
 ば朝廷初め華族方先祖の祭りはなされはしめへ、必ず跡のあるもんだから、心
 を入替盗みをやめ、冥土の親に喜ばせろ。(p. 370)

血の繋がりをを持った両親が、肉体は滅びてしまっても消えるということはなく、目に見えなくなるだけで千太との関係が消滅することなしにいつまでも続くことをいいながら、島蔵はここに他の存在を認識させる。自分たちとは身分が違うとされていた朝廷や華族方というのがそれである。

朝廷初め華族方の先祖のまつりをみてもわかるではないかという言葉は二つの意味に解釈できる。一つは華族のような庶民とは違う、えらい人でさえ先祖のまつりをしているという先祖供養への妥当性と権威である。朝廷が先祖をまつるのに意味がないはずはなく、跡形もなく消えるものでないからこそ先祖供養は可能なのであるということが朝廷、華族方という存在によって立証されているようであり、また島蔵の言葉が事実であるような説得力を持って相手の人を納得させてしまう。またもう一つは、華族という身分違いの人たちの先祖を島蔵や千太のような庶民の先祖と同一化させているという意味合いを含める言葉として島蔵の台詞は受け止められる。千太の親も朝廷のまつりと並ぶことで、市民平等の世の中が実践されつつあるということを暗示しうるということがいえるのではないだろうか。

そして、この二つ目の平等の実践において、千太の罪の改めが、その他の盗賊に浸透できる横の広がりを保証する一つの根拠として働くことになる。

島蔵 手前が分た五百円も心さへ改めたら、どうか己が算段して、福島屋へ返した上
 自首した事なら今も云、十年ならば七年か五年に成るは御上の御慈悲、夫を頼み
 に思切れ、見得にもならねへ事だけれど、金を返して自首するは流石は立派な強
 盗だと、盗人仲間の噂に成、性は善なる人の身に悪ひ事だと心付き、盗みを止る
 者が出来たら、聊御上へのご奉公人に誉られて生延るか、悪く云れて命を捨てる
 か、ここが生死の境だから、能了簡をつけて見ろ。(省略)

千太 コレ兄貴、堪忍してくんねへ、お前の異見ですつぱりと、己ア今日から改心した。(p.374-375)

千太の改心は千太個人のものだけに留まらない。それは人のうわさになりほかの盗人仲間までも伝わる効用を持つものとなる。そして他の盗人にまで広がりを持てば、それは御上への奉公にまでなる。しかし、この自首という選択は生易しい物ではない。島蔵

はこの選択において、命をかけることを強要しているように見受けられる。つまり、島蔵は罪を悔い、自首する道を選ばないならば、千太の命を取るという断罪を実行するつもりでいるのである。

命をかけた島蔵の説得でついに千太は改心することを誓う。そして、この千太の改心は島蔵がいていたどおりすぐに横のつながりとしての改心を引き起こす。まず、島蔵の店で働いていたが、盗みをして逃げようとしていた徳蔵が二人のやりとりを聞いて、自分の罪を悔い、二人の前に表れて許しを請う。また、千太がゆすりにいった望月も二人の前に表れ、改心の志を喜び、千太が盗んだお金の一部である200円をあげることを約束する。

生と死という究極の選択によって勝ち取った改心はこの劇の緊張感を最大限に盛り上げ、招魂社という無言の舞台装置と共鳴し、上記のセリフや結末は観客に強い感銘を残すことであろう。島蔵の改心が義理兄弟の千太の改心となり、それがまた他の盗人の改心に広がるということに対して、観客もまたその中の一人として説得されているのである。そしてこれ等の広がり先祖をまつることにおいて庶民も貴族もみな平等に罪を悔い、善なる生き方を約束して、御上一国家一のもとに帰属するという国民意識を観客に感銘とともに刻んでいったのではないだろうか。

5. おわりに

『島衛月白波』は主人公がすべて盗賊であるということで江戸の白波ものの劇作法によりながらも、明治になってからの開化の象徴である新聞や、郵便制度などにより、偽りの身分が発覚する。開化の制度は情報伝達の普及や速度によって、盗人を追い詰める作用をしている。しかし、追い詰められるだけでは、盗人としての自己に変化が起きるわけではない。実際、千太は島蔵に再会するまで、脅迫をし、殺意まで抱いている。

島蔵が自分の罪を因果応報によって気づくという場面はまだ江戸歌舞伎の枠組の中でのできごとであるが、しかし一方、その罪の意識を構成するものの一つの柱として、学校教育の恩恵にあずかれず、盗みを働いたという罪の自覚化がセリフとして現れる。これにより明治教育制度のありがたさを強調し、学校教育の中でも儒教をもとにする精神的な教育を受けいれ、当時においての白波（盗賊）を明治開化の前で矮小化させる。またこの過程によって島蔵の明治政府が望む方向へと自己を変える決意は揺るぎないものとなり、島蔵は千太を説得できる立場の者となる。そして招魂社の前での千太の改心はどんな素姓の人間でも国家の一市民として、帰属される可能性が開いていることを視覚化している。

黙阿弥が引退劇と公言しながら上演した「島衛」で、明治（政府）の変化や体制を

受け入れ白波さえも新秩序の中で矮小化しているのは、江戸、そして幕末における白波の世界の終焉を実感し、自らの白波物という前時代の文芸に幕を引くためのものとしてその強い意図が認められる。

【参考文献】

- 今岡謙太郎編 『歌舞伎の歴史Ⅱ』岩波講座歌舞伎文楽 第3巻 1997年 p.53-77.
河竹繁俊 『河竹黙阿弥』吉川弘文館 1986年
神山彰編 『河竹黙阿弥集』新日本古典文学明治編 岩波書店 2001年
神山彰 『近代演劇の来歴』森話社 2006年 p.130-160.
丹野顕 『江戸の盗賊』青春出版社 2005年
吉田弥生 『黙阿弥研究の現在』雄山閣 2006年
渡辺保 『黙阿弥の明治維新』新潮社 1997年 p.284-300.

要 旨

本論は江戸後期から明治の中期にかけて活躍した歌舞伎作者河竹黙阿弥が引退劇として公言した散切物『島衛月白波』を分析し、明治において庶民にもっとも親しまれていた歌舞伎という劇を通して、明治という文明開化の時代がどのように視覚化され、享受されていたのかを明らかにしようとするものである。

黙阿弥は白波作者と自他共に認められており、引退作として自分の得意分野であった、盗賊を主人公とする劇を展開させる。全体的な筋としてはこれまでの白波物の主な構成である因果応報による罪の懺悔、そして改心という江戸後期歌舞伎の特色を生かしながら、明治開化を随所に取り入れることによって善と悪を対比させ、散切物としての新しい白波物の世界が視覚化された。

主人公である島蔵と千太は明治時代に発達した情報媒体である、新聞、郵便によってその正体が盗賊であったことが露になる。島蔵は因果応報によって改心することに至るが、それでもその罪の認識において明治時代の学校の教育による倫理の枠をセリフを通して披露する。これらの装置によって文明開化の前に盗賊としての盗みという悪は矮小化する。

最後の幕ではこれらの悪の消滅として改心した島蔵と改心していない千太の対決が招魂社の前で行われる。しかし、この改心は島蔵と千太という個人の悪に留まらず、その改心は身分の上下を問わずに広がりを持つことを提示された。さらに、改心によってその罪をつぐなうことは御上のためになるとし、改心を招魂社に祭られた人と同質のものとする事で明治の国民と国家意識が浮彫りにされていることが確認される。

キーワード：河竹黙阿弥、白波物、散切物、島衛月白波 招魂社 開化

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (135-010) 서울 특별시 강남구 논현동 132-16 논현대림빌라 401호
電 話 : 02-549-6158
e-mail : padariro33@yahoo.co.kr / mandarake33@yahoo.co.jp